

図の上部には、次の文がある。

下忍弁吉

岩井半四郎

梅の社の神垣へけふ参詣に連立し

五人男の真魁 け名も雁がねの

額ひ際まだ前髪も其まゝに

若衆達らとお叱り

もかへり三橋へ上方

なら出て松源の達

引にもつれた猪口の

やりとりもおよばぬ

腕にしのが川腹の立

のもごんくの水にながして池ぎ八へ

植た柳の風次第元より力も

中嶋に四人の衆をうしろ立

かぞく八ゝる 下忍弁吉

根津の八重蔵

中村宗十郎 二

産れ古郷の上方を水道の水ですッ

ぱつと。洗あらった気きでも生なまぬるい。やぶうぐひす鶯

の京きやうそだち斯かういふ出で合あひも初はつ音ねの

里さとおさきまつくらや闇やみの

夜よも。友ともを便たよりの

螢ほたる沢ざ八は。いつれも様さまの

お光ひかりりを。頭かうへに受うけて

身みの飾かさり。秋あきの錦にしきの

山やま紅葉もみじ。顔かほも真ま赤かに

酔よたらバ。名なに大おほ八やは幡たの藪やぶ力ちから。ふだんの

猫ねこも虎とらとなり。鬼おにでも相あひ手に清しみづ水みやう町ちやう。

団だん子ご坂ざかじゃアねへけれど。誰だれがまるめに

来こやうとも。利きぬ勢きほひの根ね津つの八や重へい蔵ざう

上野の鐘五郎

市川團十郎 三

春はる八さくら桜らに八や重へい一と重へ。こぞつて

爰こゝへ清きよ水みづに。花はな見みる人ひとの長なが刀がたな。腕うでがじまんてんくすぎの天てん狗く杉すぎ。日ひ永なが

の原はらをぶらくと。がらうつく

下げ駄たに詩しを吟ぎんじ。月つき

おちがらす
落鳥の憎まれ口。

ゆきぎ じやま
往来に邪摩な浪

人も。今八むかしに袴ごし。

だいせう
大小すてゝ鴈鍋で。茶碗

で廻す 車坂。気候な酒も横合

から。狼籍なさバ忍ばれず。摺鉢山

よりあたまのはち。落花ミじんにつち

くたくも。異名にとつた雷りに。なり

ひゞいたる上野の鐘五郎

湯嶋の三吉

市川左団治

四

かんだうま
神田産れに産神から。つむじ八

ひだ
左りへ曲ツても。身のおこなひ八

まっすぐ
真直に。関八州の

ふれかしら
触頭

つまこひいなり
妻恋稻荷が隣り

ゆゑ。いぜん八狐で鳥

ゐかす
居数。こしたわるさも

虫のせへ。すっぱり封じ

て堅気になり。極印付

の遊び人を。思ひ切たる切通し。

麹漬よりあま口な。たでくふ虫もすき

屋町。下谷をきつて人中で。口を利のも

親分と。御ひるき様のおかけ故。いのらず

とても守といふ。神を力らの湯嶋の三吉

根岸の松右衛門

尾上菊五郎 五

扱どん尻に扣へた八。鶯春亭の会へ

出て。人に知られた小万年青八。ちいさな

形りだが腹ツぶくれ。田畑の布袋

のまうし子で。寺嶋種に気が

はやく。人先へ出る走り

芋。口ばし青い時分

から日々にけんくわを

諏訪のだい。夫が簀輪

の疵となり音なし川も

大根時。泥に汚れた悪い名も。

鶯坂の玉の湯で。洗ひ落して絹

越の。気も和らかに笹の雪今八達師の

一本生土地にはびこる根岸の松右衛門

手子舞小百

澤村百之助

同 小むら

岩井小紫 六

半 けふ天神の祭礼に

宗 まくばりなせし梅鉢の

團 もんに人数も相生の

左 千歳を

祝ふ雪の松

菊 花を

かざつて

五人 けふかふ

かへ